

十人力の藤兵衛と村上神社

江戸時代、秋葉大権現は、火防の靈験で広く全国に知られ、秋葉詣が盛んに行われていました。毎年、村人の代表が交代で秋葉山に詣で、火防と講中安全を祈願していました。当時は、村人が勝手に村を出ることは禁じられていたので、旅ができる秋葉詣は村人にとって楽しみなものでした。

小松村に藤兵衛という若者がいました。藤兵衛は、身の丈6尺(約2m)ほど、体重は26貫(約100kg)近くあり、筋骨隆々で、村人たちからも「十人力の藤兵衛」と言われていました。今年の秋葉詣の当番に藤兵衛が選ばれました。しかし、出発の前日、村の年寄りたちが集まって、藤兵衛と一緒にいくことになった二人の青年に次のように言い含めました。

「藤兵衛は、あれだけの大男で力も強い。道中、何があっても心配はないが、調子に乗って突飛でもないことをしでかすことがある。お前たち二人で、しっかりと目を光らせていてくれよ。」

年寄りたちに忠告を受けた二人は、藤兵衛の行動に目を光らせながら秋葉路を行きました。途中何事もなく、無事参拝を済ませることができましたが、その帰り道でのことです。道端に人だかりがしています。どうも数10貫(約200kg)もあろうかと思われる大きな石が道をふさいで通りにくくなっているようでした。何人かがその石を持ち上げようとしませんが、顔が真っ赤になるだけで、だれも持ち上げることができません。藤兵衛は、

「そんな石、俺一人で十分だ。どけどけ。」

と言うと、集まっていた人たちを押し分け、その大石をひょいと肩に担いでしまいました。周りに集まっていた人たちは、拍手喝采です。その拍手に気を良くした藤兵衛は、

「秋葉詣のいい土産になる。家まで、持って帰ろう。」

驚いたのは、一緒に来ている二人です。

「おい、調子に乗るな。ここから家まで、まだ7里もあるぞ。だめだ、だめだ。」

「なあに、これしき。大丈夫だ。」

と言うと、その大石を担いで意気揚々と歩きだしました。集まっていた人たちは、目を丸くして藤兵衛を見送りました。

下小川の渡船場に着き、渡し船に乗ると、藤兵衛は石を船に下ろしました。船頭がその石を見て、



「大きな石だなあ、船が沈みそうで、もう他の客を乗せられませんよ。石の渡し賃を二人分いただきますよ。」

と言うと、

「はあ、石の渡し賃だって、そんなものいるかい。こうすりゃあ俺の一人分でいいだろう。」

と言うと、藤兵衛はその石を膝の上に乘せて、涼しい顔をしていました。

二人の青年は、このやり取りをひやひやしながら見ていましたが、船頭が折れて船を出してくれたので、ほっとしました。

鹿島の渡しでは、藤兵衛は石を抱いたままで船に乗り込みましたが、船頭は、大男の藤兵衛に恐れをなしたのか、何も言われることもなく川を渡ることができました。藤兵衛はまた肩に大石を担いで小松まで帰っていきました。

藤兵衛が持ち帰った大石を村の若い衆が持ち上げようと挑戦しましたが、誰一人持ち上げることができませんでした。藤兵衛の十人力は誰もが認めることとなり、藤兵衛はますます有頂天になりました。

秋葉詣から2年たったある秋の日、藤兵衛は稲架を作っていました。この辺りの稲架は横木を2・3段にする高いもので、藤兵衛はその一番高いところで作業をしていました。

その時、一人の武士が通りかかり、藤兵衛に、

「おい、百姓。不動寺へはどうやって行く。」

と尋ねました。あまりにも横柄な聞き方に、むっとした藤兵衛は、高い稲架の上でほおかぶりをしたまま、これも横柄に、

「ああ、この道をそのまままっすぐに行きゃあいい。」

と言い、武士の方は見向きもせず、そのまま仕事を続けました。武士はその態度に腹を立て、

「百姓のくせに、その態度はなんだ。武士に向かって、ほおかぶりをしたまま、しかも上から物

を言うとは無礼であろう。」

と咎め立てました。

「はあ、何が無礼だ。百姓がほおかぶりするのは当たり前だ。誰にも遠慮なんかいるもんか。」と言いざま、稲架から飛び降り、そばにあった丸太ん棒を手にとると、

「さあ、何が無礼か言ってみろ。」

と今にも殴りかかりそうな剣幕で怒鳴りたてました。

武士は、その勢いとそばで見る藤兵衛の大きさに一瞬ひるみましたが、気を取り直し、

「拙者は、村上という者だ。貴様も名乗れ。勝負だ。」

と言い、刀の鞘を払い、身構えました。

「ふん、俺は百姓だ、名乗りも何もあるもんか。」

と藤兵衛は、棒を振り回して武士と渡り合いました。少しの隙をついて、藤兵衛はその丸太ん棒で武士の目を突きました。何しろ十人力の力で突かれたのですから、武士はそのまま仰向けに倒れてしまいました。目からは、大量の出血をしていました。

「ふん。口ほどでもない。」

と藤兵衛は、何事もなかったように家に帰って行きました。

しかし、その夜から藤兵衛は眠れないほど目の痛みで苦しむようになりました。三日後には目も開けられないほどに腫れあがり熱ももって起き上がることもできなくなっていました。

「突然、どうして。」

と心配する家族に、藤兵衛は、

「実は、村上という侍の目を突いて……。」

と武士と渡り合った話をしました。

「その村上様の怨念かもしれない。」

と家族は、藤兵衛が武士の目を突いたという稲架のところに行ってみましたが、大量の血の跡はあったものの、村上という武士の姿はありませんでした。

藤兵衛の目は良ならず、それどころか、藤兵衛の家族も目の病に悩まされるようになりました。

占ってもらうと、やはり、

「これは、村上という武士の祟りである。」

と言われました。そのため、藤兵衛の家族は祠を立てて、お祀りすると、やっと目の病は治まったとのことです。そして、それから毎年、お祀りを怠らなかったとのことでした。

これが今も浜北区小松に残る村上神社であると言われていています。また、そのそばには、藤兵衛が秋葉山詣での帰りに担いで帰ったといわれる石が、今も「力石」と呼ばれて残っています。

(イラスト:ふな子)

